

東京語動詞の打消し形のアクセントの生成 —中国北方方言話者によるアクセントの特徴とその要因—

王 鳳翔 (広島大学大学院)
dl64478@hiroshima-u.ac.jp

1. はじめに

中国語母語話者が対面コミュニケーションで日本語母語話者に話す際に、誤ったアクセントで発音すると、しばしば誤解を招くことがある。一方、日本語教育の面では、音声教育に関する教材が殆どないという状況があり、これまで行われた日本語検定でも、アクセントの問題は出されていない。このことは、日本語学習者に対する発音の指導が未だに重視されておらず、また、多くの学習者が日本語アクセントに対する知識を十分持っていないことを示す。そこで、筆者は動詞の打消し形に焦点を当てて、中国北方方言話者(上級日本語学習者)を対象として生成調査を行い、学習者の習得実態及び形成要因を明らかにする。

2. 先行研究及び先行研究の問題点

アクセント動詞の生成研究について、劉(2008)は中国語話者(北京・上海)を対象とし、動詞の辞書形、9つの活用及び複合動詞アクセントの生成調査を行い、習得が容易な部分と習得が困難な部分、さらに誤用パターンの傾向を指摘した。劉(2008)の観察した結果のうち、動詞未然形(「ない」形)は、生成調査の結果では、正答率が全体的に低い。また、北京方言話者と上海方言話者の間に生成の誤用パターンの差異が見られたと述べている。

これにより、中国語母語話者(北京・上海)には、動詞の打消し形「ない」の習得が最も困難であること、また、方言差のあることが分かった。しかし、なぜそういう結果が出てくるのか。その要因については、まだ十分に考察されていない。

3. 生成調査

3.1. 調査対象

本研究は、方言の影響を少なくするため、中国北方方言話者(上級日本語学習者)30名を対象とし、生成調査を実施した。(ただし、2拍一段動詞の被調査者は20名であった)

3.2. 調査手順

生成調査：日本語学習者30名に調査用語を自然に読んでもらい、その発音を録音する。生成調査に要する時間は一人につき約2分である。

3.3. 調査用語

動詞活用形	起伏式五段動詞	平板式五段動詞	起伏式一段動詞	平板式一段動詞
打ち消し形	飲まない 頼まない 喜ばない	呼ばない 遊ばない/及ばない 働かない	出ない 食べない 別れない	寝ない 真似ない 忘れない

4. 生成調査—結果の分析と考察

動詞打ち消し形の正答率について、その結果は、以下のようになる。

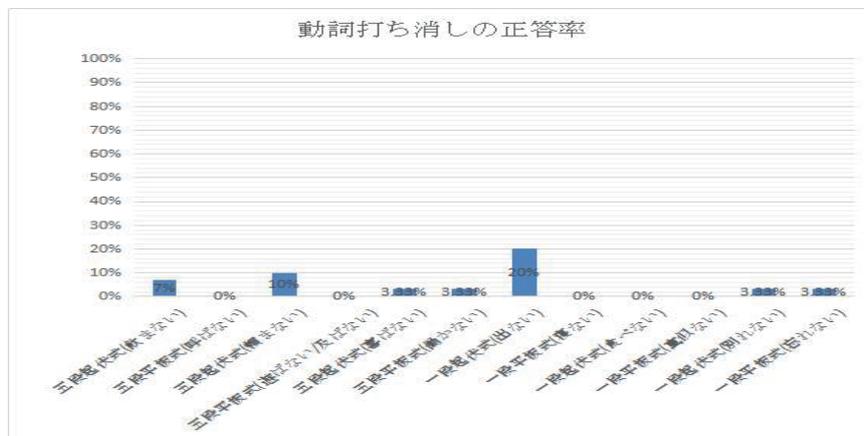


図 1: 動詞打ち消し形の正答率

図 1 より、打ち消し形（～ない）の正答率が極めて低く、学習者にとって打ち消し形の習得が最も困難であるということが分かる。平均正答率はわずか7%である。しかも、そのうち、平板式動詞の正答率が極めて低いことが見てとれる。

表 1: -2 型アクセントで動詞打消しを発音する話者の比率(%)

動詞	飲まない	頼まない	喜ばない	出ない	食べない	別れない
-2 型	93%	90%	96%	80%	97%	97%
	呼ばない	遊ばない/及ばない	働かない	寝ない	真似ない	忘れない
-2 型	100%	90%	90%	100%	97%	97%

さらに、表 1 から、多くの学習者はすべての打ち消し形を-2 型アクセントで発音する傾向のあることが明らかになった。では、この結果が形成される要因はなんだろうか。筆者は下記のように四つの側面からこれを分析した。

4.1. 形容詞（○○ない）との関わり

まず、形容詞（○○ない）の習得が動詞の打ち消し形の習得に影響を与えるのではないかと考え、追加調査を実施した。調査者のうち、10名の学習者に「汚い」「儂い」「拙い」「切ない」「危ない」の発音をしてもらった。その結果、全員が同じアクセント型で形容詞と打ち消し形を発音することが分かった。この結果から、形容詞（○○ない）の習得が動詞の打ち消し形の習得に影響を与える可能性が高いと言える。

表 2: 各教材の形容詞と動詞打ち消しの学習の順番

教材	形容詞 A1	動詞打ち消し形
総合日本語	第 2 章—第 2 課	第 2 課—第 3 課
新編日本語	第 4 課	第 12 課
標準日本語	第 9 課	第 19 課
みんなの日本語	第 9 課	第 20 課

また、表2から分かるように、形容詞(○○ない)と動詞打消し形を学ぶ順番について、いずれの教材でも、日本語学習者は動詞打ち消し形より先に形容詞を学ぶようになっている。日本語学習者は先に形容詞のアクセントを習得するので、動詞打ち消し形を学ぶ際に形容詞と同様のアクセントパターンで読むという誤った先入観が生じやすい。かつ、日本語の形容詞のアクセントも動詞のアクセントと同様に、起伏式と平板式に分けられる。平板式のうち、2拍語はなく、3拍語以上も少数である。それに対して、起伏式は、拍数にかかわらず語末から2番目の拍にアクセント核が置かれることが一般的である。さらに、形容詞の終止形はアクセントのゆれがある。特に、平板式である語が多数派である起伏式で発音されることがよくある(加藤・安藤 2016:184)。現在は、東京方言でも若年層から中年層まで起伏式で発音する人が多くなっている(加藤・安藤 2016:184)。よって、日本語学習者が「ない」を含む形容詞を-2型アクセントで発音する確率は極めて高いと言える。

以上のことから、日本語学習者は「ない」を含む形容詞のアクセント(例:きたな'い、はかな'い)の影響を強く受けるため、動詞打ち消し形「～ない形」は形容詞アクセントパターンのように発音してしまう。つまり、形容詞と動詞打ち消し形の学習の順番の違いが、打消し形の正答率に影響を与える要因の一つであると言える。

4.2. プロミネンスとの関わり

二つ目の要因はプロミネンスに関わると考えられる。言語で何かを表現するとき、その中の特定の部分に音声的に焦点を当てて強調することがよくある。

われわれは普段感情をこめて否定文を発する際に常に打ち消ししている部分を強める傾向がある。ここで、いくつかの言語の否定文を見てみる。

例えば、「Q:あなたは林檎を食べたいですか? A:(私は林檎を)食べたくないです。」という文があったとする。

1) 日本語

Q:あなたは林檎を食べたいですか?

A:(私は林檎を)食べたくないです。

2) ドイツ語

Q: Möchtest du einen Apfel essen?

A: Nein, ich möchte nicht (~~einen Apfel essen~~).

3) 英語

Q: Do you want to eat an apple?

A: No, I don't want (~~to eat an apple~~).

4) 中国語

Q: 你想吃苹果吗?

A: 不, 我不想吃(苹果)。

各言語の否定文に対する回答文を見ると、いずれの言語でも、回答文の動詞の目的語が質問文と一致する場合、回答文における目的語が省略されることが可能である。そうすると、文中で最も強調される部分は否定を表す部分になる。上の例が示すように、日本語の「ない」、ドイツ語の“nicht”、英語の“don't”、中国語の“不”という二重下線をつけた部分である。

では、曲線声調を持つ中国語を例にして、中国語母語話者は否定文を言う際に声調はどのように変化するのか。音声可視化すると図2のような形で表される。

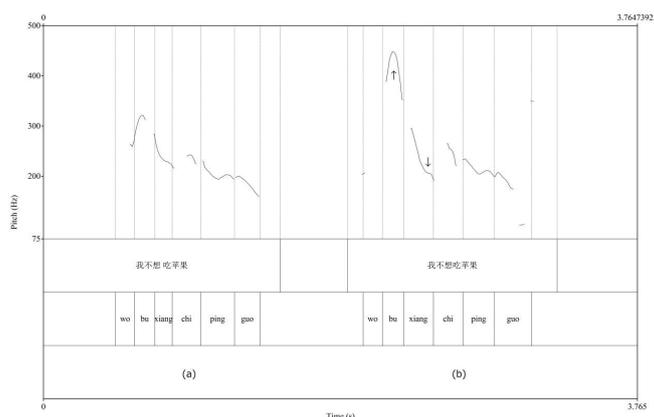


図 2: 我不想吃苹果[uo²¹⁴ pu⁵¹ əiɑŋ²¹⁴ t̚^{h55} pʰiŋ³⁵ kuo²¹⁴]

図 2 では、(a)は感情を込めず棒読みで「我不想吃苹果」を発音した。特にプロミネンスを置かない中立的な発話である。(b)は「不」のところにプロミネンスを置いた発話である。

(a)の発話と比べ、(b)は「↑」で示した部分が高く、「↓」で示した部分は(a)より目立たなくなっている。つまり、プロミネンスを置くところでは高い部分がより高くなる。その語に続く部分の高さは目立たなくなる。

以上より、中国語における否定を表す字「不」は日本語における否定を表す「～ない」という部分に相当することで、中国語母語話者は日本語の動詞打消し形を発音する時、中国語の否定文を言うように、無意識的に打消しを表す部分を強調して発音してしまう。そうすると、日本語打ち消し形「ない」の「な」のところにアクセント核が置かれやすくなる。

4.3. 日本語の頭高型と中国語の第 4 声との関わり

三つ目の要因として、母語のアクセント¹の干渉で発音し間違えることがある。中国語の第 4 声と日本語の頭高型のピッチ曲線を比較すると、中国語であれ、日本語であれ、ピッチ曲線は同じく高い位置から低い位置に急激に下降することが見られる。

従って、母語のアクセントの干渉で、中国語母語話者は日本語において打ち消しを表す部分「ない」を発音する時、母語の打ち消ししている字「不[pu⁵¹]」のピッチ曲線のように発音してしまう。

4.4. 日本語の平板式と中国語の第 1 声との関わり

表 1 より、多くの学習者は-2 型アクセントですべての打ち消し形を発音することが分かる。この現象に関して、劉 (2008)、蔡(1983)では、中国語母語話者にとってピッチを平坦に保つことは困難であり、ピッチが下降する傾向があると述べている。しかしながら、このような傾向になる原因はなんだろうか。筆者は以下のように考える。

日本語の平板式アクセントに関しては、窪園(1998:84)は日本語(東京方言)では全体の語彙の約半数が平板型で発音され、そのために、下記例文(1)のような平板式の語だけからなる文も珍しくないと述べている。「例文(1)フランスの首相とブラジルの首相が明日アメリカで会談する」(窪園 1998:84)。

¹ ここでは、アクセントを広義の意味で用いる。

これに対して、中国語の名詞においては、3音節以上の音節を発音する際に日本語の4音節「マユダマ」、5音節の「イキモドリ」、6音節の「マユツバモノ」などのように、下がり目がなく、平坦に発音する名詞は殆ど存在しない。名詞以外でも「开开心心[k^hai⁵⁵k^hai⁵⁵ɕin⁵⁵ɕin⁵⁵]、稀稀拉拉[ci⁵⁵ci⁵⁵la⁵⁵la⁵⁵]」のような副詞も少数である。

また、第1声の声調符号が付いている漢字は単独で発音される時、「媽」[ma⁵⁵]のように超高平となるが、いったん二音節のセットになった時、平坦に発音するのではなく、「音節の間に波の山を形成したり、波の上昇部分や下降部分を形成する傾向が強く見られる(平井2012:102)。

従って、中国語母語話者はピッチを平坦に保つことが困難である。中国語母語話者においては、日本語の音節が長くなると、どこかに下がり目を置く傾向が高くなるのである。

4.5. 日本語教材におけるアクセントの解説との関わり

数多くの中国の国立や私立大学で使用されている教材を分析の対象として、動詞打ち消しのアクセントについての解説をしてみる。

(1) 「総合日本語」における動詞打ち消しのアクセントの解説

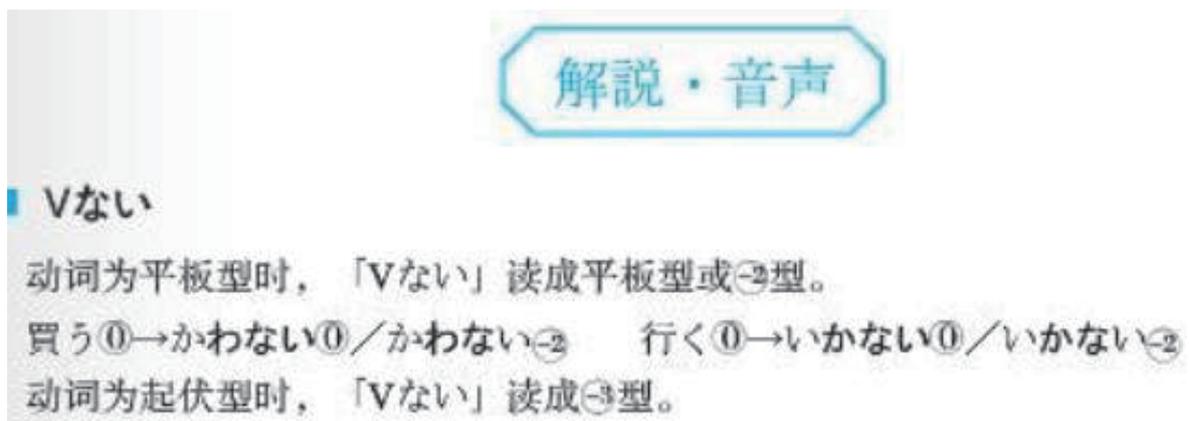


図 3: 「総合日本語」における動詞打ち消しのアクセントの解説

上記の図3からわかるように、「総合日本語」という教材は、動詞打ち消しのアクセントに関して、起伏式動詞の場合は-3型アクセントで発音され、平板式動詞の場合は0型または-2型アクセントで発音されると述べている。

しかし、「総合日本語」における平板式動詞のアクセントの解説は受け入れがたい。東京語動詞の打ち消し形のアクセント型について、多くの言語学者(加藤・安藤(2016), 松森・新田・木部・中井(2012:35), 斉藤(1997:119))は、起伏式動詞の場合は-3型アクセントで発音され、平板式動詞の場合は0型のみで発音されると述べている。しかし、「総合日本語」で述べられたアクセント法則はそれと一致していない。標準日本語(東京語、共通語、東京方言)に基づき、教材を作るのであれば、アクセントも標準日本語を基準として学習者に教えるべきであろう。「平板式動詞は0型または-2型アクセントで発音される」ということを学習者に教えると、暗記しやすいために、平板式であれ、起伏式であれ、-2型で

発音する人が多数になると考えられる。よって、今回の調査では、多くの人が-2型で平板式動詞の打ち消し形を発音してしまったと考えられる。

(2) 「新編日本語」における動詞打ち消しのアクセントの解説

「新編日本語」に関しては、「ない」の用法を解説する際に、アクセントの指導はされていない。単語帳には、名詞や動詞辞書形などはきちんとアクセント型がついているが、動詞と形容詞の活用形のアクセント型は解説していない。このことにより、学習者が動詞と形容詞の活用形のアクセント型に対する認識が不十分になることがうかがえる。

以上のことと生成調査の結果より、中国で出版された初級日本語教材における不適切で不十分な解説は日本語学習にマイナスの影響を与えると考えられる。不適切なアクセント型を学習者に教えると、学習者は覚えたままの形で、発音してしまうことが多い。初級日本語学習者は日本語の子音・母音（音素のレベル）やアクセント（かぶせ音素のレベル）を習得しないと、日本語を勉強すればするほど、無意識に自己流のアクセント型を形成する可能性が高い。これが、いったん癖になると、あとで正確なアクセントに直すのは簡単なことではない。

5. まとめ

本稿では、まず、中国北方方言話者を対象として動詞の打ち消し形の生成調査を実施し、学習者の習得実態を明らかにした。そして、筆者は動詞の打ち消し形と形容詞（○○ない）の学習順番、プロミネンス、両言語アクセントの相違、及び日本語教材におけるアクセントの解説という4つの側面から形成要因を考察した。また、本稿によって、学習者の習得実態を明らかにすると同時に、学習者自身の動詞活用形アクセントの問題に注意を喚起した。学習者に音声に対する意識を強く持たせることで、今後、日本語の学習に対してよりよい効果が得られるだろう。

参考文献

- 平井勝利 (2012) 『教師のための中国語音声学』 白帝社
- 彭広陸・守屋三千代など (2009) 『総合日本語第一冊』 北京大学出版社
- 加藤重広・安藤智子 (2016) 『音声学講義』 研究社
- 窪園晴夫 (1998) 『音声学・音韻論』 (西光義弘編「日英語対照による英語学演習シリーズ」1) くろしお出版
- 劉佳琦 (2008) 「東京語の動詞・複合動詞アクセントの生成について」 『2006年清華大学日本言語文化国際フォーラム論文集』 清華大学出版社 pp. 424-439
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古 (2012) 『日本語アクセント入門』 研究社
- 斎藤純男 (1997) 『日本語音声学入門』 三省堂
- 蔡全勝 (1983) 「中国人に見られる日本語アクセントの傾向」 『在中華人民共和国日本語研修センター紀要 日本語教育研究論纂』 第1号 pp. 26-31
- 周平・陈小芬 (2009) 『新編日语 第一冊』 上海外语教育出版社